運動会

す。 悩みのある生徒一人ひとりの事情を見ていくと、 家庭環境、 小さいときからの育ち方など、 学校だけでは解決できない問題に行き当たることがほとんどです。 カウンセラーや医師など、専門家の援助をお願いすることも必要になりますが、心の問題を扱う機関や病院はどこもたいへん混んでいて、 悩んでいる人が多いことがうかがわれます。 日本の社会が、 子どもが育つ環境として、 だんだん厳しいところになってきていることは、 事実として受け入れなければなりません。

ストレスに弱くなっていると思われるのは、 生徒たちだけではありません。 お父さんやお母さんたちも、 強い不安に陥る場合が多くなりました。 本来なら子どもたちに任せて見守っていればよいと思われるようなことでも、 がまんできずに口を出してしまうのです。 大人が口を出すことで、 表面的には問題が解決したように見えても、 子どもたち自身は問題解決の力をつけることができません。 それで、 次のときにもまた大人が口を出すことになるという悪循環も見られます。 また、 子ども同士の問題が親同士の対立に発展してしまい、 子どもは仲直りしているのに親の方にはしこりが残るという場合さえあります。 こうなると、 子どものためを思った行動が子どもを傷つけるという皮肉な結果になります。 家族や地域社会に子どもを育てる力があれば、 親がここまで不安にならなくてもすむのにと思ってしまいます。

◆ 不安が不安を

警視庁が考えた防犯標語に「**いかのおすし**」というのがあります。「知らない人について**いか**ない。」「知らない人の車に**の**らない」「**お**お声で助けを呼ぶ」「**す**ぐ逃げる」「大人に**し**らせる」の下線のところを続けたもので、 この歌やダンスまであります。 被害に遭わないための心構えとして、 異議を唱えるものではありませんが、 最近では、 不審者と疑われないかと、 子どもに話しかけることが躊躇されるようになってきました。 悪意の人の誘いにのらないことは大切ですが、「人を見ればどろぼうと思え」という発想では、 困ったときも知らない人には助けを頼むこともできないということになって、 社会全体がますます不安な状態になりはしないかと心配です。 悪い人もいるけれどもほとんどの人がいい人なのだということを教える必要もあるような気がしますが、 今の日本の風潮はそうではありません。

◆ 海外で育つ子ども

アメリカでは青少年の自殺が大きな問題になっているということを聞きました。 ドラッグや暴力等の問題は、 日本よりもさらに深刻です。 海外に住む子どもたちは、 住む国が変わり、 言葉が変わり、 学校が変わりというたくさんの変化によるストレスにも耐えなければなりません。 しかし、 だから子どもたちがより不幸だというわけではありません。 私の息子が言っていたように、 海外に住むことで、 親が（特に父親が）子どものために多くの時間を使い、 自分を大切にしてくれていると実感すれば、 安定した気持ちになれるでしょう。 日本の大都市よりもお互いの結びつきが濃い日本人コミュニティーの中で、 情報交換をしたり、 助け合ったりすることができれば、 親が孤独の中で悩まなくてもすむかもしれません。 また、 二つの社会を比較することで、 子育てについてより冷静な、 賢明な判断ができることもあるでしょう。 何よりも、 厳しい状況の中で家族が力を合わせてがんばった事実は、 子どもにとっても親にとっても将来に向けての大きな自信と力になるはずです。

啓明学園　初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター
〒 196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
TEL：042-541-1003
HP：www.keimei.ac.jp E-mail：kokusai_info@keimei.ac.jp

家庭や社会の影響のもと、また子ども自身の成長のプロセスで、子どもたちは不安を感じたり、悩んだりします。これは世界中、どこの子どもでも同じです。

これに加えて、海外で育つ、また育った子どもたちは、二つあるいは三つの文化の狭間で、意識・無意識に文化の違いに巻き込まれ、もがき苦しむ事もあります。

昔、海外子女としてもがき、今は親となった教え子は「親と家庭が救いだった」と海外での苦しみを告白してくれます。佐々先生のご子息の体験と同じです。しかし、彼は「日本へ帰国後は･･･」と言葉を濁します。

どんな環境･社会でも、子どものベースキャンプは「家庭と保護者」です。このベースから、学校へ社会へ出て、多くのことを学んでいくのが子どもだ、と強く信じています。海外での、帰国後でも、頑張って下さい！